不二

新年号

明治の尊攘派(三)……影山正治

大東塾・不二歌道会

昭和二十一年十月十日第三種郵便物認可　昭和四十二年一月二十五日発行（毎月一回二十五日発行）

昭和四十二年一月二十日印刷　昭和四十二年一月二十五日発行
昭和二十一年十月十日　第三種郵便物認可

不二第二二巻第一号　通巻第二二二号　（ひむがし通巻第二七巻・第二六六号）定価八十円

不二歌道会編
和歌 漢詩 明治維新百人一首

新書版　上製　一八五頁
定価　一八〇円　〒六〇円

一、来たる昭和四十三年に迎へる「明治維新百年祭」の記念事業の一つとして、ここに『和歌・漢詩明治維新百人一首』を刊行した。編纂着手が昭和三十九年二月完了が四十一年二月、所要日子満二ケ年。内容の卓抜さについては、その間二回にわたつて神社本庁より学術奨励金を交附されたことでもわかるであらう。

一、内容は、「和歌の部百人百首」「漢詩の部百人百編」に加へ「作者小伝（附註解）」「明治維新小史」「明治維新略年譜」から成り、中学上級程度でも充分活用できるやう全体を通じて振仮名を多くしてある。

一、明治維新百年を迎へるに当り、本書によつて、再び高く民族回生の炬火を、何よりも貴方自身の胸中に、そしてその周辺に燃え上らせようではないか！

一、今や、本書の頒布そのものが、大切な一つの維新運動となつて来て居る。全力をあげて本書の頒布に努めていただきたい。

（五部以上一部一五〇円に割引、送料実費、三〇部以上は送料当方負担）

編輯後記

○茲に昭和四十二年新春号を御送りする。この新春を迎へるに当り何よりも心明るいのは二月十一日紀元節が遂に復活したことである。苦節十余年、暗黒の夜空にほのぼのと白光がさし初めた。昭和再建維新の突破口が、橋頭堡がこゝに出来たのである今年はこの突破口、橋頭堡をいかに拡大し、強化するかにある「新展開」第二年度の善戦健斗を切望する。

○その第一は、我等が同志の倍増である。既に昨年度に於ても新同志の加入、旧同志の復活が顕著であつたが、本年は各人が責任を以て必ず一新同志を獲得し一旧同志を復活させるよう要請する。

○本年度の表紙画は岡山県支部長三宅萬造氏の盟友辻原一二三氏が担当して下さることになつた同氏の款は富弥、号は鼎文、字は抱素、一二三は通称、同氏は多年教職にあつて日教組の暴走をはばむ傍ら、画業、書道に専心されてゐる高士である。本号は富獄に　大正天皇様の御詩を書かれたが、次は「蘭」を予定されてゐる。御期待願ひたい。

○影山塾長の『明治の尊攘派』――増田宋太郎評伝は来号を以て完結する。完結次第単行本として刊行する。明治維新と昭和維新を結ぶ重要な一つの橋である本書の刊行は明治維新百年を迎へるに当つての『明治維新百人一首』に続く第二弾である。

不二　第二二巻　第一号
昭和四十二年一月廿日印刷
昭和四十二年一月廿五日発行
（毎月一回廿五日発行）
東京都港区北青山三丁目三の二七
編輯兼発行人　鈴木正男
東京都港区北青山三丁目三の二七
印刷所　大東塾印刷部
東京都港区北青山三丁目三の二七
発行所　大東塾・不二歌道会
振替東京一九〇四〇一番
電話青山(400)〇九六三番

聖寿萬歳・頌春

主宰　影山正治
参与　長谷川幸男　影山銀四郎　藤井芳人　赤木一郎　保田与重郎　浅野晃　紫垣隆　新田興　永井了吉　葦津珍彦　佐藤通次　荒木精之　原真弓　小山寛二　三浦義一　吉田益三　以下一同　松永材　西村文則　櫻井徳太郎　花見達二　以下一同　加藤三之輔　佐藤善助　室崎清平　小田十壮　三原鼎　安楽篤磨　以下一同

賛助　安津素彦　須磨清宣　水野久直　吉川豊　酒井利行　小林寛直

相談役　中央世話人一同　全国支部長一同

会友　常任中央世話人一同　本部事務局一同

不二

才二十二巻・才一号

巻頭言――突破口の拡大を……（二）

詠
ひさかたの……影山正治（四）
連理の大樟……原真弓（四）

草
一月抄……影山銀四郎（五）
新春祈念……長谷川幸男（五）

明治の尊攘派（中の二）……影山正治（六）

新春文学座談会……（二九）

新春随筆
明治生れ……田中克己（三一）
医者の正月……水野潤二（三三）
正月と局……青木安男（三四）
韓国の正月……洪秉杓（三五）
正月のこと……佐藤宇助（三七）
旅館の正月……竹村みゑ子（三八）

日本浪曼派の問題（六九）

不二の削除(3)……影山正治（三八）

建国記念日二月十一日遂に実現す……（四六）

道友通信……（四八）

表紙絵……辻原一二三画

安くんそ能く一朶を得て
微衷国家に報いん

の二首は、その席上に於ける即吟であつた。翌四日中津を出発した。第四回の薩摩行であつた。長崎に至つて先着の小林と会し、相携へて薩南の地に入つた。

馬鞭朝に払ふ薩山の霞
旅服暮に沾ふ天草の波
漂泊未だ悲しまず知己の少きを
筐中の一巻故人多し

天草島辺波烟の若し
舟は廻る奇石断湾の間
此の行枉げて風流の客と作り
看尽す江頭幾処の山

は旅中の作。「此の行枉げて風流の客と作り」の一句には深甚の胸中がこめられて居ると思ふ。

増田が鹿児島へ入つたのは一月中旬、滞在すること十余日。大西郷は、あたかも大隅滞留中で会へず、桐野その他と会談して同月二十八日頃帰途についた。恐らく一月二十九日、三十日両夜にわたる私学校党の火薬庫襲撃、三十一日夜の造船所襲撃の報は、中津への旅の途中でこれを伝聞したことと思はれる。密偵小林某とは鹿児島到着直後に分れたものと思はれる。

吏議倫安古より然り
英雄在る所国權振ふ
鋭兵十萬城壁の如し
擁護す南薩高臥の人

と旅中で詠んだ増田は、二月四日夜、中津の某亭に梅谷安良以下幹部道友を会して薩南緊迫の情勢を報じ、あはせて蹶起の神機至るを強調した。

首を回らせば東洋人を見ず
多年脱却す国の精神
桜花残つて桜洲の上にあり
僅かに保つ揚々自主の春

前詩とともに大西郷を中心とする薩摩尊攘派に対する絶大な信頼を歌つたもので、「討薩」運動時代と比すると劃然たる対薩観の進みを示して居る。そのことは自らの心魂の進みの反映であつたらう。今や増田一統にとつては、「天祖の御神慮、日本の国命が此の通りでごわす」と尊攘征韓、大アジア主義の方途を天意、神慮に於て自覚した大西郷こそは、形質ともに立派な平田門下であり、明治国学派最高の大先達として考へられたに違ひない。神風連諸士が、死せる先師林桜園の悲願を明治九年の形に於て継承実践したやうに、中津隊一統は、生ける恩師渡辺重石丸の悲願を西郷南洲の直接領導下に継承顕現せむとしたのである。増田一統は明治の国学派としての尊攘派である。したがつて、最も熊本神風連に近かつた。この点から、西郷党の一部に、たとへ若干の異質的精神が伏在してゐたとしても、中津隊一党としては、あくまでその本質面に於て西郷党を以て大神風連と考へ、自ら純乎たる小神風連としてその一翼を加はらむことを念願してゐたに違ひない。

明治生れ

田中　克已

二十年以上まえになる。わたしは昭和二十一年一月二十九日、天津貨物廠に日僑として集結、十五日、米軍上陸用舟艇八九九号にのせられ、二十日に佐世保の南風崎の旧海兵団に入り、二十二日には出発し、翌日午後七時、京都の父の家までたどり着いたが、虚脱状態で三月五日までそこにをり、六日の朝、東京のわが家に帰つた。恩師和田清博士のお宅へ歩いてゆき、戦災にも会はれず、御元気な有様を見てホッとしたのは八日のことである。恩師はさつそくわたしに仕事をおいひつけになつた。二回目にお訪ねしたのは四月八日で、先生は相変らずで元気であつたが、「加藤繁先生が亡くなられたことは承知だらうね、告別式は二十四日だよ」と仰しやつて、もとの同僚でもあり、同学の先輩でもある加藤先生のお話をいろいろなすつた。

中でもわたしをおどろかせたのは、加藤先生がお描きになつた画をたくさんお見せになつて、先生が中国経済史研究の第一人者であること以外に、こんなに余技以上の才能をもつておいでだつたことを実証されたことである。わたしは驚きかつ加藤先生を御追悼申し上げながら二十四日は妻が入院し、輸血をしたとかで告別式にも参加せず、その後、なんかの形式でおくやみ申し上げることさへもしないでゐたことを、いまとなつては、とりかへしがつかなく考へる。

加藤先生は大学者であると同時に、本当の日本人だつた。その御生涯は戦後出た「中国経済史の開拓」（昭和二十三年桜菊書院刊）に東大教授榎一雄博士が「加藤繁博士小伝」と題しておよそ百頁にわたつて書いてゐるからくりかへしていふまでもない。明治十三年旧松江藩士の内田家にお生れになり、翌年同藩士加藤家の養嗣子となられ、三十七、八年には二度応召、内地勤務、即日帰郷などで、戦闘に参加されることはなかつたが、この大稜威の万国に示された時期に青年だつた趣は、晩年まで皇国不敗の信念を抱かしめられたのであらう、ちよつとおそくお生まれになつた和田博士が、日米開戦に先だつて「必敗だがやらずにはすまないね」と仰しやつたのとは趣を異にした。

昭和十八年十二月に先生のお出しになつた「絶対の忠誠」（丁子屋書店刊）は、先生の信念を明らかに示し、わたしたちに先生がただの学者でなく、はげしい忠君のひとであることを明らかにした。この書は「簑田胸喜氏にさゝぐ」と明記され、終戦前後に亡くなつた？　いはゆる簑田旋風の主人公と知己の間柄であつたことをも明示してゐる。簑田氏のことはわたしにはよくわからない。しかし加藤先生の知己といふだけで、他の人とはおのづから評価を異にするのは止むを得ないことと思ふ。

先生の亡くなられたのは疎開先の伊豆の韮山で、御病名は心臓衰弱であつたが、二十年の終戦前後から急にお体を悪くしておいでである趣が年譜に見えてゐるから、憂愁のあまりお体をもそこなはれたのではないかと察する。前掲榎博士の小伝には日本の敗戦

に際しての御感慨が菩提寺の和上吉田行精氏宛の書翰として記されてゐる。

「八月十五日の重大御発表は臣子として真に恐懼の至に堪へず候、其後感慨縷々尽きず、此等のこと、並に信州へ移り候心事など、今は申上げず候、唯昨今念頭を去らざるは、日本に人無かりしことなり、初め謂へらく、日本には図抜けたる大人物なし、それで大過無くやってゆけるは国体の御蔭なりと、それもそれなれど、やつぱり人物無ければ駄目なりしなり、顧ふに今の日本に勝海舟が居たらば如何、それ程でなくとも、児玉小村が居たらば、かういふ窮状には陥らざりしに非るか、否、加藤友三郎や加藤寛治が居ても、もう少し違ってゐたのではあるまいか、加藤友三郎が生存したらば、或は米国と戦を開かざりしに非るか、加藤寛治が生存せばサイバンを放棄せざりしに非るか（沖縄は勿論）、後藤新平が居ても、早く国内体制を切替へて航空工業に総力を傾けたかも知れず」

と切歯扼腕のありさまと同時に、明治の人物を切々と追懐しておいでである。

わたしは昭和十三年に職を抛つて上京、参謀本部の仕事といふのを何か月かやったが、委嘱者とわたしたちの間に介在して邪魔する人物のあるのを知り、その勤め先に訪れて、面詰し、つべこべいふので身近に寄ると相手は室の隅におしつめられてわびをいった（と思った）。その翌日だったか、加藤先生から「すぐ来い」とのおたよりがあった。わたしは先生から漢代の五行思想を習ったきりごぶさたしてゐる。けげんな気持でおたづねすると「きみは先輩に対して失礼なまねをした」と長幼序ありと諄々とお説きになった。その場で何と御返答申したかはもう忘れた。そのあと参謀本部の慰労会といふのでゆくと、少佐が酔って「お前たち学者は協力しない」とクダをまきだした。わたしはよろしいが、そこには本当の学者である恩師和田博士がおいでである。わたしは開き直って「学者の協力を求めるのにその態度はなんだ」と面詰した。大佐の人で、まあまあと双方をなだめ、わたしに「ゆつくり話したい」といふ人があったが、わたしは参謀本部まで行く気にはならなかった。そのあとわたしはまた喧嘩をした。某協会につとめてその専務理事が東洋学の開拓者だった白鳥庫吉博士に失礼な言動があったと思ったからである。加藤博士はこの喧嘩をきかれて「今後の喧嘩だけは田中がよろしい」と仰せになったさうである。この文章に出て来た人物はわたしをも含めてみな明治の生れである（白鳥博士をのぞく）。明治生れにもいろいろあり、特にわたしのやうなのは本物ではなかったと、このごろ痛感する。加藤先生を偲ぶ所以である。

（詩人）

医者の正月

水野　潤三

昨年の本誌の正月号に、わが畏兄、品川淳一博士の玉稿を拝見して、地方の開業医の正月とは、何処も同じであると痛感した。

私は岐阜県の東濃の山里の開業医の次男であるが、子供の頃の医者の家の正月は、やはり何となしのんびりして、

いつもの忙しさから、父も離れて、朝早く氏神様へお参りに行き、たまに訪づれる急患を診る以外は来客と酒を飲んだり、私たちを相手に遊んでくれた。之は子供にとってはやはり嬉しいことであった。私が両親の許にゐた頃の最も深い正月の思ひ出は、元日の朝、タクシーに乗って、家中でお伊勢様につられて行ったことで有る。お参りして后、二見浦に泊り、二日の朝の日の出を拝んだ。その日のことは、今尚、その風景から、宿の御馳走にいたるまで、一部始終、私の脳裏に刻まれてゐる。かう云ふ家族づれで泊りがけの旅行は、医者の家では正月しか出来ないことであった。

現在、私は愛知県の知多半島の突端の内海と云ふ町で、小児科と内科を女房と二人で開業してゐる。特に小児科医と云ふものは、夜中でも、休日でも割合に多く診察を乞はれるものである。私が当地で開業した拾数年前の頃の正月は、私は家にゐて数多く訪づれる来客と酒を酌み乍ら、熱のある子供があれば、赤い顔をして往診し、腹痛の人が来れば注射をしてやり、元日と云へども十人くらいの患者を診たものであった。医者は昔から心のつながり』が深かった。しかし現在、之はまことに悪いことであるが、だんだん時の流れにしたがって、健康保険が普及して来るに従ひ、医者と患者との心の関係から金銭の関係に於て結ばれるようになって来た。即ち、患者は金銭を出してゐるから受診する権利があると信じ、医者は金銭で自分の技能を売ってゐると云ふ、大変に唯物主義になってしまった。私たちはこのように唯物感の世俗の中に機械化されて入って来ると、自分がゐなくても、他の医師がをれば、こと足りることになり、医者と患者の心のつながりを強く考へぬようになって来た。それでも医者の良心にもとづいて、当直医制度を自分らで作り、休日は順番に診療をすることにし、他の医者はまるまる休日は休めるようにした。しかし一面、余りにも便利主義のようではあるが、吾家にとっては有難い制度でもある。

さて吾家は正月はお手伝いも、看護婦もみな休みになるので、家にゐると、来客に日頃医師として働いてゐる女房は、一段と通常の日よりも忙しく、雑事に追はれてしまって、折角の正月もゆっくりすることが出来なくなる。かう云ふことと、前に書いた子供のときの伊勢の正月の楽しさを思ふとき、家中一緒に楽しく、ゆっくり出来る日を過すことは、大変に大事なことであると思ったので、元旦の行事を終ったのち、二泊三日の旅に出ることにきめて来た。東京に上ったり、京都を訪ねたり、木曾川畔に泊ったりした。一年に一度きりの、家族ぐるみが、朝から晩まで一緒にをられる日であったし、私や家内にとっては、生命にかかわる仕事からはじめて離れられる日でもあった。

さてしかし、今年の正月は、私の住んでゐる家屋が百年以上経ったものであったので、隣接地に昨年春より、新築工事にかかり、ようやく建ち終ったので、何処にも旅に出ず、新しい書斉で、やっと念願かなって、求めることが出来た本居宣長翁の自筆の歌を床に懸けて、毎年の、年の始めに行ふように、古事記巻頭と、私の専門である薬理学の私の